

みどり戦略は生物多様性も

農水省は2021年5月に地球温暖化対策として、CO<sub>2</sub>ゼロエミッション化を目指すみどりの食料システム戦略を打ち出した。農業の持続性確保に向けて、2050年までに、化学農薬の50%低減、化学肥料の30%低減、有機農業面積割合を25%等の目標実現を掲げる。これら目標は少しずつ浸透はしてきたものの、CO<sub>2</sub>ゼロエミッション化と同時に生物多様性の維持・増進もねらいとしていることについてはほとんど知られていない。

減農薬、減化学肥料、有機農業については農法も絡むが、概して物理的に理解が可能であるが、生物多様性というと象徴としてトキヤコウノトリ等のイメージが浮かぶものの、今一つ農業との関係がイメージし難いことも確かである。

**南方町生物多様性戦略**

そうしたことから「環境保全米」の先進的な取組みで知られる宮城

県北部、ラムサール条約登録湿地でたくさんの渡り鳥で有名な伊豆沼、長沼が管内にあるJAみやぎ登米に足を運んでみた。

当JAで環境保全米の取り組みを主導している一つが南方町水稲部会で、「南方町生物多様性戦

り。⑤の冬水田んぼは冬期に湛水することによって渡り鳥をはじめとする湿地に依存する多様な生物の生息地とするものである。そして特記しておきたいのが①の田んぼの生き物調査で、06年から継続実施しており、8つあるブロック

活動コンテンツ」で農林水産大臣賞を受賞している。

「めだかのおたより米」認証

JAみやぎ登米では、有機JAS（転換期間中を含む）、無化学農薬・無化学肥料、減化学農薬・減化学肥料の3タイプのメニューを提示して環境保全米の生産を推進している。南方町水稲部会の令和5年産の環境保全米の比率は71%となっている。担い手の減少と、これにともなう農地集積・規模拡大から除草剤に頼らざるを得ない農家の増加で、その比率は低下傾向にあるとはいえ、高い比率を維持しているということが出来る。

こうした中、同部会は先に見た

生物多様性取組事項の①～⑤に加えて、⑥環境保全型農法の実施、⑦CO<sub>2</sub>を減らす取り組み、も含めて、それら取り組みを「めだかのおたより米」として認証する。この認証をつうじて「生命を育む田んぼ物語り」を消費者に伝えるとともに、多様な生き物と共生する農業を推し進めている。

時流を読む

生物多様性重視の環境保全米

農的デザイン研究所代表 眞谷 栄一

略」を打ち出し、①田んぼの生き物調査、②魚道の設置、③めだかの学校、④アイガモ除草、⑤冬水田んぼ、等に取り組む。

②の魚道設置は日本一長い魚道とすることを目指しており、③のめだかの学校はビオトープづく

ごとに年2回の調査を行っている。JAみやぎ登米全体としても毎年6月の第2土曜日には、小学生から肥料・農薬メーカー、卸も含めて140～150人が調査に参加する。生物多様性は豊かさを増し、15年には「いきものにぎわい企業